慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アルベエル・カミユの思想と風土について : (ジャン・グルニエとの比較による一考察)
Sub Title	Albert Camus : his ideas and topography
Author	片桐, 邦郎(Katagiri, Kunio)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1956
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.6, (1956. 12) ,p.148- 160
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00060001-0148

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アルベエル・カミュの思想と風土について

——（ジャン・グルニエとの比較による一考察）——

片桐邦郎

一

ジャン・ポオル・サルトル J. P. Sartre は、『異邦人解説』Explication de L'Etranger の中で、アルベエル・カミュ A. Camus の思想の真の師について、次のように言つている。

……Mais ses véritables maîtres sont ailleurs : le tour de ses raisonnements, la clarté de ses idées, la coupe de son style d'essayiste, et un certain genre de sinistre solaire, ordonné, cérémonieux et désolé, tout annonce un classique, un méditerranéen.

J. P. Sartre : Explication de "L'Etranger"
(Situation, I. P. 102)

カミュは、地中海に面したアルジェリア生れの作家であり、サルトルも指摘しているように、その作品には、地中海風土の影響が強く認められる。カミュについては、既に多くの評論が書かれているが、風土の影響の濃厚な、初期の風物詩的エッセイ『結婚』Noces (1938) は、今までに、しばしば批評家達によつて、アンドレ・ジイド A. Gide の『地の糧』Les Nourritures Terrestres と比較、

考察されている(例えばピエール・アンリ・シモン P. H. Simon やロベエル・ド・リュッペ Robert de Luppé など)。

確かに、この二作品は、共に両作家の青年時代の書であり、アルジェリアを始めとする地中海沿岸の豊饒な自然に対する一種の感覚的汎神論を展開している点で、共通するところがある。しかし、この両者を仔細に検討すると、むしろ、相違に於て顕著である。

即ち、ジイドの場合には、二十四歳の時にアルジェリアに旅行して、この地の乾燥した強烈な自然から啓示を受け、それ迄の宗教観、人生観から解放され、現在の瞬間の躍動に陶酔し、生の喜悦を感じているのであるが、一方、解放されたとは言え、過去のヨーロッパ的な神や罪の意識が、屢ゝ姿を現わしており、又、未来に対しても、期待による道を開いているのである。これに反して、始めからアルジェリアに生れたカミュは、解放されるべき神も、過去も持たず、ただ現在の、地上での生の悦びを唱つており、更に、アルジェリアの自然の強烈さ非情な冷酷さから、人生の不条理性に目覚めて、人生には未来も希望もないと考えているのである。つまり、アルジェリアという地中海風土からカミュが獲たものが、《調和》accord と《不条理》absurde という二つの対立した観念であるのに対して、ジイドの場合には、カミュの《調和》に相当する生の肯定の要素のみであり、これと矛盾対立するものは、この風土にはないヨーロッパの神の観念なのである。

この両者に共通な生命への讃歌については、地中海の風土が、ギリシャ文化を培つた地であることを考える時、至極当然のことと思われるのであるが、両者の相違点であり、カミュの思想の特性でもある《不条理》については、ジイドとの比較に於ては、その特性の強調に停まるだけであつて、それ自体の解明には、少しも役立たないように思われる。

私は、以上のような、風土の影響の強いカミュの思想の特性は、彼とジャン・グルニエ Jean Grenier とを比較することによつて、一層明らかになると思う。私の考えではカミュの初期の思想形成に、特にその風土観には、グルニエの影響が明らかに認められるし、更に、この両者の比較によつて、カミュの思想の発展過程に於ける、ある不動性についても、一解釈が成立すると考えるからである。カミュの作品については、その殆どが紹介されているので、以下グルニエについて説明しながら、比較検討して行こう。

II

ジャン・グルニエ Jean Grenier (1898—) は、カミュのアルジェの大学時代の師であり、青年時代のカミュの思想形成に強い影響を与えているが、特に彼の個性的な自然観がカミュに与えた影響は、極しいものがある。

グルニエの著書には、今日まで、大体次のようなものがある。

Les iles	1933
La liberté (textes inédits de Jules Lequier	1936
La philosophie de Jules Lequier.	1936
Santa-Cruz, et autres paysages africains.	1937
Essai sur l'esprit d'orthodoxie.	1938
Sagesse de Lourmarin.	1939
Inspirations Méditerranéennes. (écrit en 1939)	1941
Le choix.	1941
De l'Indifférence. (étude publiée dans "L'Existence")	1945
Les iles, suivi de Inspirations Méditerranéennes.	1947
Entretiens sur le bon usage de la liberté.	1948
Braque. Peintures.	1948
L'esprit de la peinture contemporaine.	1951

A propos de l'humain.

この中で、『諸島』Les îles (1933)、『サンタ・クルズ』Santa-Cruz, et autres paysages africains (1937)、『地中海の霊感』Inspirations Méditerranéennes (1941 : écrit en 1939) 等は、カミュの初期の風土に関するエッセイ『裏と表』L'Envers et l'Endroit (1937 : écrit en 1935—36)、『結婚』Noces (1938 : écrit en 1936—37)、『ミノトオル』Le Minotaure ou la Halte d'Oran (1939) 等と相前後して発表されており、グルニエの自然観、地中海風土観を示す絶好なエッセイである。

先ず『諸島』Les îles (1933 : réédité en 1947) であるが、グルニエの初期のエッセイ集であり、彼の思想の出発点を示すものである。特に、この中の一つのエッセイ、『空虚への魅惑』L'attrait du vide に描かれた彼の幼い頃の回想は、彼の自然観を知るために興味深いものである。

六、七歳の頃、樹蔭に横たわつて、雲一つない大空を眺めながら、彼は、ふとこの大空が《空虚》vide の中へ呑込まれてしまうように思う。それは、彼の《虚無》néant に対する最初の印象であり、彼の言葉によれば、すべてを決定する瞬間であつたのである。それ以来、彼は自然に対する空しさに魅せられてしまう。この空虚感、喪失感は、彼にとつて、決して苦々しいものでなく、喜悦をともなうものであつた。その結果、彼は、une quasi-parfaite indifférence, une apathie sereine——l'état du dormeur éveille. に至つたと言つている。

グルニエが自然に対して感じた《空虚》、《無関心》な状態は、『諸島』の他のエッセイでは、例えば、『ル・シャ・ムウルウ』Le chat mouloud に於ては、動物に対して、『インド・イマジネエル』L'Inde Imaginaire に於ては、インド思想へと、対象は変るが常に持続され、追求されている。結局、彼は自然に対する《空虚》から出発して、常に非人間的なものに関心を示し、遂には《絶対》absolu に到達しようとするのである。インドへの彼の関心は、インドの哲学思想が《非人間的》inhumain であるからなのだ。《絶対》に到達するためには、自己自身から、或いは又、すべてのユマニテから、自己を引離さなければならない、と彼は言つている。

このように自然の《空虚》、《無関心》から《絶対》に至ろうとするグルニエは、キリスト教的な神への道を辿らず、後年に至つて、例えば『自由の有用性への対話』Entretiens sur le bon usage de la liberté (1948) の中の第二篇 NON-AGIR (無為) に示されているように、Lao-Tzeu (老子) や、Taoisme (道教) に於ける《無》や《絶対》に近づき、一種の無神論的神秘主義に至つているのである。『諸島』に於ては、自然に対しての《空虚》、《無関心》、《非人間的》等、《絶対》に至るべき一連の感賞、観念と対立して、《人間的》humain の観念があることにも注目しなければならない。グルニエの関心は、勿論、前者に強いのであるが、彼は、《非人間的》な思想をインドに見出したように、これと対立する観念、《人間的》で《節度》mesure のある思想を、ギリシャの中に見出しているのである。

さて、このような自然観、風土観に於ける二つの対立観念は、地中海風土に於ては、特に重要視されねばならない。何故ならば、彼によれば、地中海風土には、《空虚》、《無関心》な《非人間的》な観念と、ギリシャ的《節度》のある《人間的》な観念が、共に見出されるからである。

……Ainsi peut-elle (La Méditerranee) inspirer une métaphysique qui soit à égale distance du culte de l'Absolu et du culte de l'Action.

Inspirations Méditerranéennes : Préface.

『地中海の霊感』Inspirations Méditerranéennes は、地中海の風土を、プロヴァンス、北アフリカ、イタリヤ、ギリシャの四地域に分けて描いているが、同じ頃に書かれたカミュの『ミノトオル』と比べると、後者が風物詩的であつて、観察も自然や風習の描写に停つているのに対して、前者は、歴史的であり、一層分析的であると言えよう。

カミュの初期の風土に関するエッセイ集は、その詩情豊かな文体からも、彼の並ならぬ才能を知りうるものであるが、思想的には、まだ充分な形成をみるに至らず、むしろ、青春の情熱と感動とにみちあふれたものである。

Singulier pays qui donne à l'homme qu'il nourrit à la fois sa splendeur et samisère ! La richesse sensuelle dont un homme sensible de ces pays est pourvu, il n'est pas étonnant qu'elle coincide avec le dénuement le plus

extrême.

Noces : P.44

ここに示された《偉大さ》splendeur と《悲惨》misère とは、彼の別の言葉によれば、前者は《生の喜び》joie de vivre, 《調和》accord であり、後者は《沈黙》、《無関心》つまり、《不条理》になるのであるが、このようにカミュが地中海風土から感じた二つの対立した感情は、グルニエが同じ風土の中で認めていた前述の対立観念の感覚的な把握であると考えられよう。

カミュには、グルニエのような東洋的な神秘主義への嗜好は全くないのであり、地中海的な明晰性、厳密な精神を持つているのだが、そのヨーロッパ的な神から隔絶した汎神論的風土観には、『諸島』以来のグルニエの自然観に拠るところが大であつたと思われる。いずれにせよ、カミュが風土の中に感じた《調和》と《不条理》の感覚が、思想的体系をみるためには、《不条理》については、『シジフの神話』Le mythe de Sisyphe (1942) を、《調和》については、これがギリシャ的《節度》による《反抗》に完成するためには『反抗的人間』L'homme révolté (1951) を待たねばならない。

III

カミュは、『シジフの神話』に於て、従来結論と考えられてきた《不条理》を出発点とすることを明らかにし、彼独特の《不条理》の理論を展開した。しかし、この理論は、これに数ヵ月先立つて刊行された『異邦人』L'Etranger に於て、主人公の性格や行動の中に、見事に肉附けされているのである。

母親が死んだ翌日に、海水浴に行き、女と遊び、喜劇映画を観たり、恋人に対して、愛などは無意味であると言い、太陽のために殺人をする、この小説の主人公ムルソオ Meursault の特異な性格、行為や、至るところで Cela m'est égal. とか Cela n'avait aucune importance. などと考える、すべてのものに対する極度の《無関心さ》は、その特異性の故に、わが国でも〝異邦人論争〟を起したくらいであつた。事実、ムルソオの行為は非常に現実的でありながら、しかも純粋に抽象化されているのであり、彼がしばしば示す万物へ

の無関心は、人生の不条理性を証明するためのものであり、従つて、すべてに異邦人であつた彼が、獄中に於て死と対決して、実存の意識に目覚める過程が大事なのであるが、それだからと言つて、その無関心が、小説構成のために創造された性格態度であると考えることは、その心理をあまりに現代的に解釈して共感を抱くのと同様に、当を得ないことと思われる。何故ならば、ムルソオの無関心さは、この小説の舞台であるアルジェリアの風土の中に育まれた性格であり、アルジェリア生れのカミュは、この小説を書く以前に、この地の人々の示す不思議な無関心さに注目しているからである。『ミノトオル』(1939) の中に、これを証明すべき次の描写がある。カミュはアルジェリアのオランの町の映画の広告文に書かれた驚くべき誇張が、単に南フランスに特有な誇張癖によるのではなく、オランの人達が示す選択への無関心によるのだ、と言つている。

On aurait tort de croire que s'exerce seulement ici le goût de l'exagération propre au midi. Exactement, les auteurs de ce merveilleux prospectus donnent la preuve de leur sens psychologique. Il s'agit de vaincre l'indifférence et l'apathie profonde qu'on ressent dans ce pays dès qu'il s'agit de choisir entre deux spectacles, deux métiers et, souvent même, deux femmes.

Le Minotaure : P. 21

われわれは、この例によつて、この地に無数のムルソオを見出すことが出来る。しかし、彼等は、その自然のもたらす富が豊饒なために、反つてその不条理性に気がつかないのである。カミュは、一人のムルソオに《不条理》を直視させ、死と対決することによつて、その極端にまで押進めて行けば、実存への道が開かれるのだということを証明したのである。

ところで、このような風土の中に感じる無関心さは、グルニエが、『諧島』以来、追求しているものである。次に、地中海風土に於ける二、三の例を挙げよう。

Je suis né au milieu des indifférences et je les porte en moi.……

(Provence), Inspirations méditerranéennes

Mais le vide que je sentais si souvent en moi, à la Kasbah, il me suffisait de lever les yeux vers le ciel pour le sentir comblé……

(Afrique du nord), id.

L'Italie réalise de manière unique le vide autour de l'homme……

(Italie), id.

グルニエは、更に、一九四五年の『無関心について』De l'Indifférence に於て、《無関心》を次の六つに分類して考察している。

1.) L'Indifférence par apathie
2.) L'Indifférence par égoisme
3.) L'Indifférence par l'impartialité
4.) L'Indifférence par espoir
5.) L'Indifférence par désespoir
6.) L'Indifférence par désintérêt

彼が、その最も適切な形而上的態度として考えている六番目の désintérêt による《無関心》は、更に、二つに分けられると言う。

L'Indifférence par désintérêt——……deux formes de cette indifférence : l'une d'après laquelle toutes choses ont un égal intérêt, l'autre d'après laquelle aucune chose n'a d'intérêt.

A propos de l'humain : P. 108

この第一の型は、換言すれば《等価性》équivalence の《無関心》であり、第二の型は、《絶対的》な《無関心》とも言うべきものである。後者は、東洋に於ては、そのよい例が見出されるが、ギリシャには、このような完全な無関心はない、とグルニエは考えている。前述の『ミノトオル』の例に示された、選択への無関心は、この第一の型と言えるのであるから、従つて、地中海風土に於ける《無

関心》も《等価性》であると言えよう。実際に、カミュの初期の作品には、主人公の価値判断が、《不条理》の《条価性》でささえられている場合が多い。一例を『カリギュラ』Caligula に挙げよう。

Caligula : Il faut donc que tu croies à quelque idée supérieure.

Cherea : Je crois qu'il y a des actions qui sont plus belles que d'autres.

Caligula : Je crois que toutes sont équivalentes.

Caligula : P. 179

以上の比較検討で、カミュの初期の思想、特に、その地中海風土観に、グルニエの影響が大きかつたことが認められたと思う。

四

ところで、カミュの思想には段階的発展があり、アルベレスAlbérès が指摘したように、幾つかの時期に分けて考えられるのであるがその発展の著しかつた時期は、一九四三—四四年頃、つまり、第二次大戦の頃であつた。作品で言えば、『ドイツ人への手紙』Lettres à un ami allemand (1943—44) であり、ナチスドイツの占領下に書かれたこの四つの書簡集は、大戦の貴重な体験によつて、カミュが思想的に発展したことを示すものである。この時期に、カミュは、《不条理》の《等価性》から《正義》の価値の発見へ、《無関心》から《選択》への発展をなし、社会的連帯感のモラルを加え、やがて戦後に於て『ペスト』La Peste (1947) に開花するのであるが、一方、グルニエは、この間、既に述べたように、《絶対》への道を歩み続けたと考えられる。

このように、カミュが、思想的にグルニエから離れ始めたとは言え、それは、彼が地中海風土への関心を失つたことを意味するのではなく、反つて戦争を契機として、彼は地中海風土とヨーロッパとを対立させ、自らは地中海風土に属する者として、これらの地を歴史的風土として把握しようとする傾向を深めているのである。このような歴史的把握の傾向は、地中海の風土に属してはいるものの、

北アフリカのアルジェリアという歴史のない土地に育つたカミュの、歴史や伝統に対する一種の渇望であるとも考えられるであろう。そこで、次にカミュのヨーロッパ及び地中海風土への観念について考えてみよう。

カミュの思想の一発展期を示す『ドイツ人への手紙』は、彼のヨーロッパの観念を知るためにも、注目されねばならない。カミュは、この書簡の中で、ヨーロッパの観念が、占領下の抵抗に於ける、彼の希望であつた、と言つている。

Pendant tout ce temps où nous n'avons servi obstinément, silencieusement, que notre pays, nous n'avons jamais perdu de vue une idée et un espoir, toujours présents en nous, et qui étaient ceux de l'Europe.

A. Camus : Lettres à un ami allemand : P. 58

……Mais elle (l'Europe) est pour nous cette terre de l'esprit où depuis vingt siècles se poursuit la plus étonnante aventure de l'esprit humain. Elle est cette arène privilégiée où la lutte de l'homme d'Occident contre le monde, contre les dieux, contre lui-même, atteint aujourd'hui son moment le plus bouleversé.

id. P. 62

ヨーロッパの、輝かしい知的闘争の歴史が、カミュの抵抗の支えになつているのである。それ故に、彼は、ヨーロッパはもう一度つくり直さねばならない、と考えるのである。カミュは、イタリヤや、スペインについて語る時にも、その国の古い歴史や文化を忘れることはない。『時事、(二)』Actuelles II の中にあるように、フランコの独裁下のスペインに呼びかける時、彼は、セルヴァンテス Cervantes やカルデロン Calderon の名を挙げているのである。

地中海風土について言えば、この地に栄えたギリシャの《節度》の思想が、今日のヨーロッパの《過度》démesure と対立して考えられている。

J'ai dit seulement que, depuis cent cinquante ans, l'idéologie européenne s'était constituée contre les notions de nature et de beauté (par conséquent de limite), qui ont été, au contraire, au centre de la pensée méditerranéenne.

J'ai dit que du même coup un équilibre s'était rompu, que l'Europe n'avait jamais été que dans cette lutte entre midi et minuit et qu'une civilisation vivante ne pourrait pas se constituer en dehors de cette tension, c'est-à-dire sans cette tradition méditerranéenne négligée depuis si longtemps.……Des rives d'Afrique ou je suis né, la distance aidant, on voit mieux le visage de l'Europe et on sait qu'il n'est pas beau.

Actuelles 2 : P. 62

……Notre Europe, au contraire, lancée à la conquête de la totalité, est fille de la démesure.

L'été : P. 108

『反抗的人間』L'homme révolté (1951) は、カミュが、《不条理》に対する《反抗》の立場を確立したエッセイであるが、その中心主題は、結局、《節度》と《過度》の二つの対立した観念であり、結論を一言で言えば、ギリシャ的な《節度》による《反抗》こそ、真の反抗である、と言うことである。

一九五三年に刊行された『夏』L'été は、戦前から戦後にかけての風土に関するエッセイや紀行文の集録であり、カミュの一貫した風土観を示すものである。又、同じ年の六月に、演劇祭に参加上演された二つの戯曲、カルデロン Calderon の〈La Dévotion à la Croix〉と、ラリベイLarivey の〈Les Esprits〉は、カミュの翻訳、翻案によるものであり、一六・七世紀の古典文学へのカミュの関心を示すものであろう。

五

さて、われわれは、いま、カミュの作品を初期の『結婚』から、最近の『夏』まで辿ってみると、そこに、前述の思想の展開があるにもかかわらず、ある種の不動性、思想の停滞を認めることが出来よう。それは、一九四三年に『異邦人』を称讃したサルトルが、五

二年のカミュとの論争に於て、ムルソオは何処へ行つたのか、と非難するに至つたものであり、或いは、これより前に、四九年にガエタン・ピコン Gaëtan Picon が、カミュを古典的な意味に於ける大作家であると認めながらも、

On peut regretter que Camus n'aille pas jusqu'au bout de sa révolte et de ses passions. Nous avons l'impression d'une énergie en suspens, d'une force arrêtée a mi-chemin. Le goût classique de la maîtrise de soi, de la sobriété, de l'ardeur contenue rencontre la volonté morale d'un équilibre, d'une sagesse. D'où la perfection-mais aussi la demi-mesure, l'éclectisme. Les dangers qui menacent Camus sont impliqués dans ses qualités mêmes : il risque de passer du dépouillement à la pauvreté, de la sérénité à la froideur, de l'équilibre à l'immobilité.

Gaëtan Picon : Panorama de la nouvelle littérature française P. 101

と指摘しているところのものである。ところで、この《不動性》immobilite は、四三・四年の発展以後に認められるのであるから、われわれは、ここに、次のように考えることが出来るのである。カミュの思想は、果してこの時期に次の段階へと発展をなしたのであるか？ これは、初期の時代に、カミュがグルニエの強い影響を受けたことを考え合わせると、次のようにも言えるのである。即ち、カミュは、その初期に受けたグルニエの影響から脱し得たか？ である。

風土観を始めとして、カミュの思想形成期には、グルニエの強い影響が認められるのであるが、今日まで、この両者の比較考察は、ほとんど行われていない。ただ、ムニエ E. Mounier のエッセイの中に、これを裏書きするような、注目すべき次の言葉がある。

Une sorte de quiétisme semble être la tentation permanente de la spiritualité de Camus. La violence africaine, qui aime contraste et lutte, combat avec lui. C'est pourquoi sans doute nous avons trouvé dans ses démarches un tour si volontaire, une telle passion de discipline : il faut fouetter l'heureux sommeil méditerranéen de l'indifférence ou de l'indulgence. Même quand il dialogue, Camus semble toujours lutter contre un abandon. Ne serait-ce pas une défense contre cette nonchalance ontologique qu'il accueillit peut-être trop complaisamment à l'âge des fortes

influences chez son premier maître Jean Grenier ?

Emmanuel Mounier : Albert Camus, ou l'appel des humiliés

("Esprit", Janvier 1950)

現存作家については、今後の成長発展もあるので、軽々しい判断は慎まねばならないのであるが、私の考えでは、グルニエの影響から抜け出た時に、カミュの新しい発展の道が開かれるように思われる。いずれにせよ、この両者の比較は、カミュの思想形成を知る上にも、又、今後の発展を計るためにも、もつと検討されるべきであると思う。

（註1）以上は、昭和三十一年六月、学習院大学で開催された、日本フランス文学会に於て発表したもので、いくらか加筆訂正してある。

（註2）この後に入手した Roger Quilliot の〈La mer et les prisons〉(1956) には、『諸島』がカミュに影響を与えた、と簡単であるが明記してある。

（註3）現今のアルジェリアに於ける政治的紛争については、昨年七月の L'Express 紙に、カミュは二度にわたつて時事評論を書いている。

Terrorisme et Repression : 9. Juillet, 55.

L'avenir algerien : 23. Juillet, 55.

（註4）今年の五月頃に、カミュは、久しぶりに小説〈La chute〉を発表したとのことであるが、まだ入手していないので、くわしいことはわからない。